

女隷少年強制マーク

お仕舞村集



はなはな

俺は今、とあるお兄さんに性奴隷として飼育されています
お兄さんは俺が気持ちよくなれるよう、体をたっぷり調教してくれました



でもいつもすぐにイってしまって、プレイはうまく続きません
だから俺はいつもお仕置きされていました
来る日も来る日も…

『長時間固定放置玩具責めの刑』

少年は手足を一緒に拘束され、股間を露にされている状態で体を固定された乳首にはローターが張り付けられており、その振動で腰の奥のほうがズクズクと熱く疼いてしまう「う、うっ…これ、やだ、あっ…♡」



「じゃあ、行ってくるね 何時間かしたらちゃんと戻ってくるから」
「そう言って男は少年のアナルに器具を挿入する」
「ひっ…!?!? やっ 待って、え! やだ、お願い! 行かないで…っ」

返事は聞こえず、部屋にはローターの機械音が響くのみだ

少年は乳首への刺激に耐えられず、

「あっ、!! っんうっ♡」

すると、いいところをピッタリと捉えた先端部分が

そこをグリグリと押し込んでいく



「うあああっ...っ♡っあっ、あっ...ああんっ♡」

中を締め付けるたびにぐりっ、と中が押されては

その反動で器具が引き戻り、また先端に前立腺を強く押し込まれる

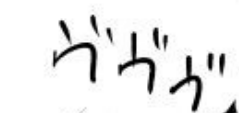
「やつ...あ、とまんや、」

ぐりっ♡ぐりっ♡ぐりぐりっ...♡

「あっああ...あっ♡、ひっ♡ あ、またイっちゃ、ああああっ...!!」

快楽の波に合わせ自分で前立腺をリズム良く圧迫してしまい、

しばらくの間イキ続けてしまった



長い時間が経ち、メスイキしすぎて
体の感覚はおかしくなっていた
今自分がイっているのかどうかもよくわからない
「ああっ！たすけて、えっ♡♡ーごじゅじんさまあっ……!!」



少年の体力がなくなりかけた頃、助けを求める気持ちとは裏腹に、
突然器具の先端部分が振動しながら自動で前後左右に激しく揺れ始めた
「あっ！?! ああっ♡なにっこれえ、っ!?!」

ヴィーローツ、ヴィーローツ……！
それは遠隔で動かすことができる電動バイブであつた
ただ挿れられているだけでもイキ続けていたというのに、
追い打ちをかけるように前立腺を虐められる



「あああッッッ……！やだっ、壊れるううっ……！」
バイブは不規則な動きでそこをひたすら抉り、苦しいほどの絶頂地獄を与え続けた
あくまでもお仕置きであることを忘れてはいけけないのだ

「……あつ、……うぐつ……!っひ……!」
男が戻った時、少年の周りには何かしらの液体でぐちゃぐちゃになっていた
「こんなに汚して、悪い子だなあ」



長時間経ってもなお、バイブの先は
少年の前立腺をしつかりと捉えた状態で暴れ続けている
「あああつ……!ごしゅじんさま、はやく!とってくらさ、ああ……!っ……!!
許して、ちゃんとついうこと聞く、からあつ……!」

「ちゅ……」

「ここ、汚しちゃったんだからまずは謝らないと」
「あ、ごめんにやっ」
言い終わる前に男はバイブを手で激しく抜き差しした
「あ、ああああっ！！！！」



「ほら、ちゃんと謝って？」
「や、ああああっ！ご、ごめ、あ、ああッ！！」
そのあと追加で10回ほどイカされるまで、お仕置きは終わらなかった

少年は複数の男に代わる代わる犯され続けていた
何人目かの男は少年の腰を掴み乱暴に自身の腰を打ち付けている
パンッパンッパンッパンッ！

110


$$\frac{110}{14}$$

男の体力が尽き、肉棒が勢いよく抜かれたと思ったら
間髪入れずに次の男のものが体内に入ってくる
1秒も全力ピストンが止まることはない

今度は腰を落とされ、ピンポイントで前立腺を狙われそこを押しつぶされた
男は少年の尻の上でジャンプするように体重を乗せてずんっ!ずんっ!と突き下ろす

「アッ、ああっ!!!!!!アああ、あ、っ!!!!!!」
「俺達もう2週目だから、皆お前の気持ちいいところ見つけちゃったよ」
「やああ、もう、っそこ!!!!!!だめ、え!!!!!!、こわがないでえっ!!!!!!」
「ドチュッ!ドチュッ!ドチュッ!ドチュッ!ドチュッ!ドチュッ!ドチュッ!ドチュッ!ドチュッ!ドチュッ!」
♡♡♡♡♡



じきに遅れてやってきた二人の男のものに対し、ほかの者達は驚愕した

「うわ、えっぐw」

「これはさすがに壊れるだろ」

ズ...

おちゃっ

おちゃっ

おちゃん

おちゃっ

おちゃっ

ズ

ゼウ

は、

おちゃん

おちゃん

その男の肉棒には、挿入した時にイイところにあたるよう

いくつものパールが埋め込まれていた

「さ、おっきいパール入りのおじさんちんぽで、そのかわいい前立腺破壊してあげるよ」

「.....っ!!!!!!」

激しく嬲られ続けた少年のアナルは棒状の形を覚えて拡がり、ひくひくと痙攣し続けていた

「結構ガバガバにしちまったなあ」

「退屈になってきたしいそろそろアレやるか」

「やだっ…もうやめて…え…っ」

戻らなくなっちゃううっ……………!!」

はい

はあっ

ず

いっ

ひく

ひく…

「暴れる力残ってんならトぶまでイキ狂ってくれや」

「大人しくしろっ! そっち押さえてろ」

少年は僅かな力で抵抗するが大勢の男に押さえつけられ、少しももがくことができなくなった

中を思いっきり広げられ、うまく息ができない
直腸の中が2本の肉棒でギチギチに詰まっている
穴が元の形に締まろうとして、めりめりと悲鳴を上げる感覚がした



「意外と動けるな」
「すげえ、キツキツだw」
やがて二本の肉棒が不規則に出たり入ったりしてくる
少年は悶絶し身をよじるが、体をがっちり抑え込まれて逃げることはできない

やがて二人の男は息を合わせるようにして、2本のものを交互に、
または同時に出し入れし始めた

1本はお腹側で前立腺を圧迫し、1本は奥までズンズンと入ってくる
それぞれの強い快感が、一気に脳に流れ込み、ものすごい深イキに襲われる

「天国見せてやるよ!」

「おら! トんじまえ! せー、のオっ!」

ばちゅんっっ!!

2本とも入り口まで引いてから、一番奥まで一気に貫かれる

「ツツツ!!」

ばちゅんっ!!

少年は何度目かの突きで目の前が真っ白になった



『亀頭磨き&強制大量噴水の刑』

少年は椅子の上で体を拘束されていた
しかしいつもと違って特に腰回りをきつく拘束されており、
少しも腰をずらせない

「やだっ、いやだあっ……!!!」

「お願い、それだけはあ……っ!!!」

はあっ

はあ

男は大量のローションを用意してお仕置きの準備を進めている
少年はついさっき男の手によって射精させられたばかりだというのに、
これから自身に何が起こるかを推測してひどく拒んだ

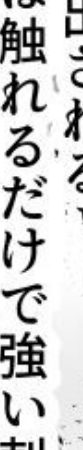
「なんでもするからあっ……!それだけは……!お願いしますっ!!!」

「よしよし、たくさん亀頭ごしごししてあげるから
い……っっぱいお潮吹こうな♡」

い……っっぱいお潮吹こうな♡



ローションがなみなみ入った桶からガーゼが取り出される、
射精したばかりの亀頭にとって、その細かい網目は触れるだけで強い刺激になる
ローションによって摩擦を減らされゾリゾリと擦られようものなら
しびれるような感覚をつま先に感じ、
否応なしに声が漏れてしまう

A black and white illustration of a hand holding a piece of gauze. The hand is shown from the side, with the thumb and index finger gripping the edge of the gauze. The gauze is folded and has a textured, grid-like pattern. The background is dark and indistinct.

74

40...

ぞりぞりぞりーっっっ♡

「ひっ……!!?!?ーっ!!?!?!ツ
ああーっ!!?!?!?!」

苦痛で全身がガクガクと跳ね回るが、体はしっかりと縛られており、亀頭を1ミリも逃がせない

少年は噴水のように何度も断続的に潮吹きさせられていた。バケツの水をひっくり返したくらいに床はびしょびしょになっている。このために少年はお仕置きの前に大量のスポーツドリンクを飲まされていたのであった。散々擦られた亀頭は真っ赤に腫れあがり、もう何も出ないのに、と言わんばかりに尿道口を開閉させ汁をトプトプと捻り出している。



やがて男はボロボロになったガーゼを捨て、ストッキングをローションに浸し、自分の手に被せた。それが少年の陰茎に触れると、それまで感じていたようなぞりぞりが陰茎全体を襲った。

「ひいいい……ッ……！！！！もおいやめてえ……っ」

ストッキング越しに陰茎が強く扱かれる
さつきより手を動かしやすくなったせいで、擦られるスピードが段違いに速い
加えて男は亀頭を確実に往復するように動かしていた

[illegible]

「まだ出し切ってないよね？もつと吹け！」
頭が焼き切れるような感覚がし、また勝手に液体が噴き出された
意識が途切れ途切れになるが、
気絶してしまうと後にさらなるお仕置きが与えられることを少年は知っている
少年は脳の許容量を超える刺激に悶絶しながら、必死に気を保ち続けた

『アナル拡張破壊の刑』

少年はまた腕を縛られ、男に向かって尻を突き出すように指示された
何も言われなくともそこをめちやくちやに虐められるのだと理解でき、身を震わせる



男はアナルビーズを取り出すが、
それは少年が想像したものよりもはるかに大きいものだった

「二つ目の球が入り口に押し付けられる」

「うううう……ううう……ううう……!!」

「もっと力抜かなきゃ入んないよ? ほら、深呼吸して」



みち... ゴ... ゴ...

「ん、ツぐううーっ……、んあ、ああつ……ツ!!!!!!」
入り口は球の侵入を拒み続けていたが、球の直径が一番大きいところを超えるとぬぼんっ♡、と自ら球を吸い込んでいった



ふん

ふん

少年の直腸内は大きな球でぎゅうぎゅうになった。この球一つ一つが中を抉りながら自分の体内から捻り出てくるなんて、とても考えられなかった。

「お、あ、あああ、あ、あ、あつ!!!♡♡♡」

抜かれる瞬間に弱いところを何発も殴られるような感覚がして、頭がおかしくなる

ぽん

愛



おまっ♡



「もうだめ……！ つハッぐ、あ、お尻、めくれちゃ……うっツ！！
男は手を止めることなく、アナルに球を詰め込む作業を続けた。

「うぐううううッ!!!!!!!!!!」♡♡♡

散々虐められた少年のアナルは括約筋が言うことを聞かなくなり、
穴が開きっぱなしになってしまった

男は腕に黒い手袋を嵌めると、簡単に指を3本ほどアナルに飲み込ませる
「もったかわいなおまんこにしてあげる
ゆっくり入れるからね」

んぐ...

んぐ...

んぐ...

ずぷ...

「ッ...ー...う、ぐッ、あ...うっつ...!!!!!!」

男は5本の指をすばめて、ゆっくりと掌全体を回転させながら中に押し込んでいく
少年のアナルは入り口の皺を必死に伸ばしながらも、
大きな掌を腕の部分までぬっぷり♡と飲み込んでしまった

腕が抜けそうになるたびに汚い喘ぎ声が漏れてしまう
男は入り口をめくるようにしばらく腕をピストンさせた後、突然腕を勢いよく引き抜いた
ぎゅぽんっツツ!!!!!!
「ジン おお オツッ!!!!!!??」



「ああかわいい……っ♡ すごいよこれ、おまんこみたいにびろびろになってる♡」
「……っ……っ……っひぐっ……ううッ……!!!!!!」

男が優しく撫でるそこは大きくめくりあがり、中の真っ赤な部分を隆起させていた
少年の大事な部分は男の手によって、恥ずかしく異様な形状にさせられてしまった

ぐぽっ!!!ぐぽっ!!!ぐちゅううつつ!!!♡♡♡

男は拳を握り、腕全体を回転させながら

長いストロークで大きくピストンさせた

奥をグチュグチュと攪拌されると脳が痺れるほどの快感を感じ

少年は何度も深く、深く絶頂した

抜けそうなギリギリのところまで

腕をねじりながら引いては、

ゴリユリユツ！と一思いに拳を突き刺す

中で太くゴツゴツしたものが暴れまわり、

少年は暴力的な快感にイカされ続けた

「ンおオ^ッお^ッお^ッッ!!!あつう^ッッ!!!」

ん
ア
ア
あ
お
お
お
お
つ
ー
ー
!!
!!
♡
♡

4888

「こんなエグいことされて、いっぱいイっちゃったね♡ よっ、と」
ぐぼんっツツ!!!!!!♡♡♡♡
男は中を拳で抉りながら、最奥から勢い良く腕を引き抜く
「ジンおオッおッツツツ!!!!!!♡」

太く長い腕が一気に抜かれ、中がずるるっと引きずり出されるような感覚に
少年は今までで一番激しく絶頂してしまう

「……ッ……う……ッう……ッ……ッ……ッ!!!!!!」

少年は真っ赤にめくれ上がったアナルを波打たせながら、深いイキの余韻でしばらくイキ続けた
お仕置きだというのにまたイキ癖がついてしまった
いつまで経っても少年は「悪い子だ」とお叱りを受けるのであった

END